

No. 1451

特集

中国残留孤児

昭和58年2月25日、今年もまた肉親を捜す中国残留日本人孤児がやってきました。戦後の混乱の中で、中国に残された日本の子供たちも、戦後38年たった今ではもう中年。しかし自分の本当の名前を知りたい、父や母に一目でもあいたいと願う気持は押えても押えても消えることはありませんでした。

日本へ着いた一行45名は、祖国日本の象徴、富士山を見物。

その頃、孤児一行のテレビ報道をくい入るようにつめる一人の婦人がいました。苑田正枝さん(41才)です。苑田さんは3か月前まで、顔淑琴と呼ばれる孤児の一人でした。顔さんが肉親を捜し出すきっかけは新聞にのった一枚の写真でした。肉親と~~多~~感激の対面、だが母親は中国の土となっていました。肉親を捜し出した苑田さんは去年の11月、未娘の徐偉さん(13才)を一人つれて日本へ永住帰国しました。中国には長い間、別居していた夫と、すでに就職している二人の息子が残りました。

苑田さん親子は現在、東京・江戸川の中国引揚げ者寮で、1ヶ月8万余の生活保護費を受けて細々と暮しています。今の苑田さん親子にとって一番の悩みは何と言っても言葉。二人とも日本語はほとんど話せません。

訪日中の孤児一行の中に子供の時から友達だった候鳳英さんを見つけた苑田さんは、すぐに宿舎となっている東京・代々木の青少年センターを訪れました。候さんは、中国から引揚げる途中、両親をなくし、今の所、全く手掛りはつかめていません

中国社会で成長した日本人孤児にとって、言葉の次にむつかしいのが職場の確保。これという技術もない苑田さん。将来はギョウザの店でも開きたいという希望を持っていますが、今の所、なかなかむつかしいようです。

来日した孤児たちにとって、肉親を捜し出すことは最高のよろこび。しかし、この時から新たな問題が始まります。中国に残した家族のこと、言葉の壁、職場の問題、娘の将来——など、日本で再出発する元中国残留孤児、苑田正枝さんにも大きく複雑な問題が待ち受けています。